

【被災地・能登訪問の3日間】

6/26～28 の3日間、昨年元旦に発生した能登半島地震の被災地、石川県は能登を訪ねました。いくつかの仮設住宅を回りうたう会をして、またオンラインでもつなごうという企画に声をかけていただいたのです。

被災地への想いはあれど、家族のことや日々詰まっている演奏や指導の仕事もあり、被災地へ行く踏ん切りがつかなかった中、大熊の日程に合わせてくれて、また家族もOK をくれたことで、自分も被災地訪問の末席に加えていただくことができました。

26日、北陸新幹線が開通してとっても便利になった部分もありますが、金沢に到着してから能登方面に向かう電車は昼間1時間に1本。なおかつ金沢→津端は JR ではなく第三セクター「IR いしかわ鉄道」のため、乗り換えを前提にしたダイヤではなく、金沢駅で50分以上足止め。

かつての北陸本線は、新幹線開通とともにほとんどが JR から切り離されました。津端から七尾までは JR 七尾線なのですが、七尾から先の終点穴水までは再び第三セクターの「のと鉄道」となります。新幹線が開通することで、都市と都市のアクセスは向上する一方、「住民の足」であるローカル線は切り捨てられ不便となり、若い層の人口は都市部へと流出するばかりです。これは東北や九州でも同じ現象が起っています。



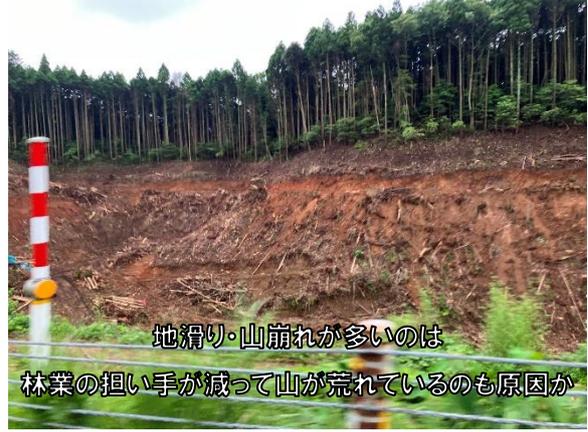
この日に訪ねたのは、輪島市と同じく震度7の激震に襲われた羽咋市。私が到着したのは、他の仲間が被災者共同支援センターで話を聞き、支援物資のより分け作業を終えた後でした。宿にて翌日からの行程を確認しながらそれぞれの想いを交流。東京からは私大熊、静岡・浜松より三線を持って北村さん。石川の隣・福井より山田文葉さんと清水雅美さん。京都から今回のまとめ役である時田さんと保育のうたごえの木戸さん。そして広島から山上茂典さん。ここに石川のうたごえの仲間のみなさんも加わります。

翌 27 日、朝に再び共同支援センターを訪ねて追加の物資を車に積み込んで奥能登へと出発します。のと里山海道を北へと進み、途中の徳田あたりまではスイスイ行きましたが、そこから先は崩落した道路を迂回する臨時の道が多く、上下左右に車は大きく揺られます。ようやく輪島に入ると、市の中心部にも拘わらず電信柱は大きく傾き、電線がたわんでいる風景、ガレキの山と草ぼうぼうの空き地、ほとんどの屋根にブルーシート。

これが被災1年半も経った後の姿なのとショックを受けました。途中までの道路事情が良かった理由は、国からの復興予算で、都市部に近い道路の車線拡幅工事が行われ



道のあちこちが崩落し、臨時迂回路を進む



地滑り・山崩れが多いのは
林業の担い手が減って山が荒れているのも原因が



電柱は傾き、電線も大きくなっている

ていたからでした。石川県はこの拡幅工事を復興の柱としているそうで、しかしその予算とリソース(重機や人員)を、奥能登につながる道や、傾いた電柱などの早期復旧へと割くべきではないかと素人ながらに感じました。

輪島についてお世話になったのは輪島診療所。石川県健康友の会奥能登ブロックの佐渡麗子さんです。

ご自身も被災者で、避難所生活での経験などをたくさん聞かせてくれました。ここで2つのチームに分かれて午前の行動へ。大熊は鳳至(ふげし)の仮設住宅を訪ねました。住んでいる方にお話を聞くと、間取りは4畳半1部屋と小さいお風呂と2畳のキッチン。この空間に2人が暮らします。珠洲市の仮設は1人1部屋なのだそうですが、輪島では1~2人で1部屋、3~4人で2部屋とのことで、布団を引いてしまえば他に何も置けないような狭さです。輪島は大き目の一軒家で暮らしていた方がほとんど。また、壁を隔てて隣に人が暮らしているという経験のない方たちにとって、そうした生活は肉体的・精神的負担も大きく、体調を崩す方、亡くなられるかたもいたと聞きました。1時間のうたう会、1曲目を歌い終わったあと、参加してくださった方が「どこにマイク付けてんの?」「え?マイク使っていないの?はあ~」と驚いてくれたのがうれしかったです。



鳳至の仮設住宅は木造



壁に歌詞を映してうたう会

参加された方々の世代に合わせた「懐メロ」もやりながら、「ジャンケンポンの歌」では、京都の木戸さんが絵本を読みながら歌い、北村さんは三線で沖縄の歌を奏でました。午前のうたう会を終えて集合し、午後は3チーム・3か所に分かれてきました。私は木戸さんとのペア。訪ねたのは宅田(たくだ)の仮設住宅です。午前の鳳至は木造でしたが、こちらはプレハブでした。平らな屋根なので、雨が降ると音が響くそうです。



宅田の仮設住宅、後ろに見えるのは
廃校になった中学校の体育館
被災後しばらく遺体の安置所だった



宅田の入居者に話を聞く

午前の経験で、懐メロを歌うだけでなく、体を動かしたり、笑ったりできる歌が大切と感じ、ちょっとネットで調べて口腔運動「パタカラ」を取り入れた歌を歌ってみました。

(おたまじゃくしはカエルの子のメロディで)

パンダ子パンダ パピプペポ

たんたんタヌキは タチツテ

カラスの行水 カキクケコ

ライオンらんらん ラリルレロ

これに、能登から帰ってきて追加の歌詞を考えてみました。食べ物バージョンです。

パスタをパクパク パピプペポ

たこ焼き食べたら タチツテ

カツ丼かきこみ カキクケコ

ラーメンライスで ラリルレロ



能登の佐渡麗子さん(前列右から2番目)
全国からのメンバーと
石川のうたごえのみなさん



6/27 羽咋市でのうたう会
最後は「心つなごう」で
みんな手をつなぎながら

そして、より元気になれたらと、さらに最後に歌詞を加えました。

パツともうひと花

楽しく咲かそう

カッコ悪くていいから

らしく生きよう

まだまだこれから 青春だから

歌おうパタカラ

午前午後と2つの仮設住宅を訪ねて歌って感じたのは、こうして歌う場が定期的に必要ということ、そして必要なのは懐メロや復興支援ソングだけではなく、身体を動かし表情を動かすような歌ではないかという事でした。



夜は、輪島港の居酒屋「芽吹」にて交流。ただ飲みに来たのではありません。このお店は、震災と火災、そして豪雨で店を失った地元飲食店の料理人たちが集まって始めたお店で、焼け野原からの復興を思い「芽吹」と名付けたそうです。



この日泊まったのは民宿わじま。柱も床も輪島塗が施されている立派な建物ですが、階段の木材に入った亀裂が震災の激しさを物語ります。「2階の廊下を歩いてみてください、建物がゆがんでいるのがわかります」と言われ、実際に歩くと確かに廊下が少し下り坂になっていました。「しっかりと直したいですが、直すには長期間の休業とお金がかかりますので…」と旅館の方は苦笑いしていました。



資材の高騰と建設業者の人手不足で、かつて坪80万だった建築費は今200万を超えているとか。住民の方々も、解体は補助金が出ても、とても新しく家を建てることはできず、建ててもそのローンを払い続けるための仕事がありません。東日本大震災や阪神淡路大震災と比べて、あまりにも「置き去り」感を感じます。国鉄民営化の際「ローカル線はなくなりません」という約束から15年もしないうちに穴水～輪島間が廃線、珠洲・蛸島方面も後を追うように廃線となり、震災以前から緩慢に国から見捨てられてきたともいえます。

そして今回の震災・豪雨で、いよいよ本格的に見捨てようとしているのではないかと。27日は羽咋市の会場を借りてのうたう会、こちらではオンラインで全国をつなぎ、Youtube配信も行いました。アーカイブでご覧になれますので、良ければ見てみてください。

https://www.youtube.com/live/0dhRx5kafFQ?si=d_s-oYEa94AGXfQl

6/30、石川県は仮設住宅の入居期間を最長2年から3年に延ばすと発表しました。今回能登を訪ねた私たちにできることは、一緒に歌い、能登のみなさんに元気になってもらうこと。そして能登の状況を地元に戻って伝え、知ってもらい、声を上げることだと思いました。

(大熊 啓)

